

中学校から高校への学校移行における時間的展望と学校適応

専攻 人間発達教育
コース 教育コミュニケーション
学籍番号 M18004D
氏名 長谷 守紘

問題と目的

中学校から高校への学校移行における時間的展望と学校適応に関する先行研究を概観すると、①高校入学前後を比較する際、入学後を移行直後としばらく学校生活を経験して安定してきた時期に分けて3時点以上で短期縦断的に適応過程を検討すること、②研究者間において混在していた学校適応の定義や測定方法を整理し、学校移行の様相をとらえるためには個人と環境が適合しているときの認知や感情に焦点をあて、直接的に適応感を測定すること、③学校移行における適応過程を時間的展望との関連で検討する際、時間的連続性や過去のとらえ方を加えることの3点が課題として挙げられる。

そこで、本研究では、中学校から高校への移行における学校適応の変化を時間的展望との関連で検討することを目的とした。

方法

A県B市内の市立中学校10校の3年生1528名を対象に第1波の調査(2019年2月)、A県B市内の県立高等学校5校の1年生を対象に第2・3波の調査(第2波:2019年4月,1388名,第3波:2019年9~10月,1349名)を行った。そのうち、本研究では3波すべての調査に回答した871名(男子422名,女子425名,未回答24名)を分析の対象とした。

現在をふくむ未来に対する時間への意識22項目(都筑,2009)を4件法で、過去に対す

る時間への意識21項目(Chishima, et al., 2016; 石川, 2013)、現在と未来および過去とのつながりの意識10項目(石井, 2015)を5件法で、得点が高いほど、各意識や態度を強く持つことが示されるように得点化した。個人一環境の適合性の視点から適応状態を測定する青年用適応感尺度30項目(大久保, 2005)の文頭に「学校で」を付け加えて用いた。5件法で、得点が高いほど、各適応感を強く持つことが示されるように得点化した。

本研究は、兵庫教育大学の倫理審査委員会の承認(2018-49)を得て実施した。

結果

1. 時間的展望と学校適応との関連

時間的展望と学校適応の各変数間の関係を検討するため、時間的展望と学校適応に関する尺度間の相関係数を算出し、時間的展望の各下位尺度得点を独立変数、学校適応の各下位尺度得点を従属変数として重回帰分析(強制投入法)を行った。

その結果、多数の有意な関連がみられたが標準偏回帰係数が.20以上ある変数に着目すると、空虚感(学校適応全ての側面に負の影響)、現在と未来の連続性は課題・目的的存在に正の影響、将来への希望は被信頼感・受容感に正の影響、過去否定は劣等感に負の影響を及ぼしていた。また、将来への希望、空虚感、現在と未来の連続性、過去否定については、中学校から高校へ

の移行を伴っても学校適応への影響力が維持されていた。

2. 時間的展望の持ち方と学校適応との関連

高校入学前の時間的展望の持ち方によって学校適応の変化に違いがあるかを検討するために、時間的展望の持ち方タイプを抽出し、そのタイプによって各調査時期における学校適応の得点に差がみられるかを検討した。

その結果、高校入学前にポジティブな時間的展望を持つタイプがネガティブな時間的展望を持つタイプよりも学校適応が高かった。しかし、学校移行に伴い、後者の適応感は上昇し、前者の適応感は低下傾向であった。

過去とのつながりを感じているタイプは将来の課題・目標の存在が高かった。また、現在や過去に対するネガティブな態度や認識は劣等感を強めていたが、その中でも未来展望を持ち、過去とのつながりを感じているタイプでは劣等感が弱まっていた。しかし、過去を引きずるタイプよりも過去は過去とわりきるタイプの方が、移行後に居心地の良さや被信頼・受容感、課題・目的の存在が高かった。

考察

まず、中学校卒業期の時間的展望におけるポジティブ・ネガティブ次元が、移行後の高校での適応感に大きく影響していた。ポジティブな時間的展望は適応感を高め、ネガティブな時間的展望は適応感を低めていた。例えば、将来への希望を持つことが、移行後の高校において他者から信頼されていたり、受け入れられていたりする適応感を生み出していた。未来に対する明るさに伴う肯定的な感情や態度は、他者との信頼関係から育つと同時に、現在の対人関係における信頼関係を生み出すと考えられた。しかし一方で、学校移行に伴い、ネガティブな時間

的展望を持っていた生徒は適応感が上昇し、ポジティブな時間的展望を持っていた生徒は低下傾向を示した。中高を接続した適応支援における個別の状態の見立てに有益な示唆を得た。

次に、課題・目的をもって充実した高校生活を送る生徒たちは、中学校卒業期から時間的連続性を持っていた。現在と未来はつながっている、現在と過去はつながっているという感覚によって、未来にある目標に現在の意識を向けることができると考えられた。また、現在や過去に対する否定的な態度や認識は劣等感を高めていたが、過去を否定的にとらえながらも受容した上で、未来へとつなげていこうとする態度や意識を持つことによって劣等感が弱まることも示された。しかし一方で、過去を引きずる生徒よりも過去は過去とわりきる生徒の方が、高校への移行後に居心地の良さや信頼・受容されていると感じ、課題や目標を継続して持ち続けて充実した学校生活を送ることができるという結果も得られた。現在と過去が一面的につながっていればよいというわけではないといえる。

以上の知見より、中学校卒業期に向けて、働きかける作用が一様ではないことや個別対応が必要な場合もあることに留意して、現在と過去のつながり、現在と未来のつながりを高める働きかけを行うことによって、移行に伴う適応状態が良好になる可能性があることが示唆された。

今後の課題として、①学校適応によって時間的展望の違いを説明することも可能であること、②時間的展望や学校適応の変容が環境移行によるのか、発達的变化によるのかの検討が不十分であったこと、③過去のとらえ方の尺度構成や発達的变化を再検討することが挙げられた。

主任指導教員 中間 玲子
指導教員 中間 玲子